

奴隷制度とマーク・トウエイン

—— 文学における幼年体験と自己教育 ——

岡林 稔

Slavery and Mark Twain

Childhood Experience and Its Significance in Literature

Minoru OKABAYASHI

はじめに

『ハックルベリー・フィンの冒険』¹⁾ (以後『ハックの冒険』と略す) (1884) は少年ハックの語る冒険物語であると同時に、マーク・トウエインが「人種差別・奴隷制度」の問題を「自己教育」として自らに課した倫理学のテキストでもある。マーク・トウエインにはもとより30年前の《アンクル・トムの小屋》(1852) の作者 Stowe 夫人のように、キリストの愛による奴隷解放宣言をわざわざ行う時代的必然も意志もなかった。南北戦争を Abraham Lincoln 率いる北軍が勝利したことによって黒人奴隷はすでに解放されている。その解放宣言から20年を経過した時点でこの作品は発表されているが、それにもかかわらず「人種差別・奴隷制度」の問題がメインテーマとして重苦しく底流にあるのはどうしてだろうか。1870年代から80年代にかけてマーク・トウエインははるか西部の故郷 Hannibal への郷愁に浸り、枯渇した創作の泉のふたびあふれるのを感じながら『トム・ソーヤーの冒険』(1876) を書き、そして『ハックの冒険』の執筆に取り掛かる。そして10年ほどすると『プッディングヘッド・ウイソンの悲劇』(1896) が書かれることになる。また一方ではやがて世紀末から20世紀にかけての「アメリカ帝国主義批判」を中心に、国家体制への批判精神を自らの中に熟成して行く時代でもある。

『ハックの冒険』は大人社会の事件に巻き込まれるスリルに満ちた少年の冒険の物語だけではなく、逃亡の身の上の奴隷を救うべきか、それとも「社会のモラル」に従うべきか、少年の中で激しく揺れ動く心の葛藤を描いた物語である。その逃亡奴隷ジムとともに彼の自由を望みつつ筏でミシシッピ河を下りながら、少年ハックは南部奴隷州の「良心」に悩まされ続ける。そして 思い悩んだあげくに、ミス・ワトソンにととう黒人逃亡奴隷ジムの居場所を知らせる密告の手紙を書く。すると生まれて初めて罪が洗い清められたような気持ちになり、「地獄に落ちるところだった」と胸をなでおろすのだったが、その直後筏の上でのジムとの旅のかずかずの胸を打つ友情の場面が思い出され、ハックは友情と裏切りの葛藤に身を刻まれるように苦しむ。しかしブルブル手を震わせながら密告の手紙を握り締め、“All right, then, I’ll go

to hell.” こう言って、ついにはその手紙を破り捨ててしまう。物語はクライマックスを迎え、読者は人道主義が人種差別・奴隷制度に打ち勝った感動を覚え、少年ハックに絶大な共感を覚えながら物語を読み終えようとする。

しかし作者マーク・トウエインは32章以下、トムスの再登場によって始まる、いわゆる「調和を欠いた茶番劇」などと批判されることの多い結末部の展開を付け足した。単なる構成の失敗か、それとも読者にカタルシスを与える替わりにむしろアーリアネーションを与える小説としての効果を選んだのか。マーク・トウエインは物語の展開の中でなぜ盛り上がった「倫理的気運」にわざわざ水を差すような方法を選んだのかと、さまざまな議論を生みだした要素をはらんでいる。

「すべてのアメリカ文学はこの作品から発する」と絶賛しながら、Hemingway は「もしこの作品を読むのなら、黒ん坊ジムが少年たちから盗み戻される所でやめなければならない。これが真の結末である。あとはごまかしだ」²⁾ と批判したのもこの点である。マーク・トウエインの理解者の一人である Bernard DeVoto の「調和をみだす茶番劇」とか「ほかの部分とは無関係に独立した、自己満足で即興のエピソード」³⁾ という批判もそれに類したものとしてあげられる。

しかし、そうした批判的な評価とは反対の立場をとる批評家もあり、例えば 結末部を失敗だと断定せずに、最後の10章の茶番劇は、本来いかなる「良心」からも自由のはずのハックの身上を脅かす「倫理的気運」に水を差すためのものであるとし、トムスの再登場による結末の騒動はマーク・トウエインの『ハックの冒険』の全体の意味の認識そのものであると評価している。⁴⁾ また、物語を劇的構成の観点からとらえ、善悪の判断ではなく「神の摂理」を物語の基本的な法則ととらえ、結末部を「意味のある茶番劇」であり、「分離したエピソードでもなく、小説全体として関連しあった統一がある」として評価する批評家もいる。⁵⁾

実際アメリカ社会の奴隷制度にかかわる文化的構造はもっと複雑に錯綜したものであった。そもそも自由と平等を掲げて独立宣言をしながら奴隷制度を保持してきた、国民的規模での「自己欺瞞」があったのである。それが集中する最後の10章の文明批評に焦点を合わせ、マーク・トウエインの「幼年体験と自己教育」という観点から論じてみることにする

I

トムが演出・進行する「茶番劇」と呼ばれる逃亡奴隷ジムの救出劇に触れる前に、おなじく作者がハックの行動様式について述べている箇所について触れておかなければならない。最初に「地獄に行ってもいい」、そうやってジムの逃亡幫助の決断をし、人道主義に根差したハックの胸のすくような行動は、しかしながら詳しく見ると、作者からは文字通り人道主義とは直接つながらない行動として説明されている。

「頭の中からすべてのものを空っぽにして、そして僕はもう一度悪（ワル）の方を取るんだ。それが僕の血筋なんだから、そう育って来たのだから。それ以外は不可能なんだ。」

(I shoved the whole thing out of my head; and said I would take up wickedness again, which was in my line, being brought up to it, and the other warn't.) (180)

「飲みつぶれてなめし革工場で豚と一緒に眠り」(9)、「その家族の誰ひとりとして読み書きのできない」(18) 白人社会の最下層にある Pap の子供であるハックの環境が説明される。筏の上で捜索隊の追及を受け、このような決断を瞬時のうちに迫られる場面でもこれと同じような説明がある。

「正しいことを身につけようたって僕には無駄なことは分かってるんだ。ちっちゃいときちゃんとした教育を受けないとチャンスがないんだ。それで、僕は自分にこう言い聞かすんだ。正しいことをすると困ることになって、そして悪いことしてもちっとも困らないで、しかも同じ報いを受けるとなれば、正しいことを身につける意味なんてないんだ。それで困っちゃったんだ。答えがでて来ないんだ。それでもうこれから悩まないことにしようって思ったんだ。そうしてこれからはその時一番てっとり早いものに決めようって。」

(and I see it warn't no use for me to try to learn to do right; a boy that don't get started right when he's little, ain't got no show ... Well, then, says I, what's the use you learning to do right, when it's troublesome to do right and ain't no trouble to do wrong, and wages is just the same? I was stuck. I couldn't answer that. So I reckoned I wouldn't bother no more about it, but after this always do whichever come handiest at the time.) (75)

読者は絶大の共感をもってハックの人道主義的な勇氣に感動を覚えるのだったが、作者はそれに水を差すように、すべて「生い立ち」の悪さによって、さらにあれこれ悩む事なく「最も手っ取り早い」決断をしたのだとハックに言わせている。31章でもそれを受けてそのまま、「僕の血筋なんだから」と再びハックの行動の背景を繰り返している。トムとの脱獄劇の共同作業においても当然この行動原理が保持されるが、さらに筏の上でイカサマ師たちとのトラブルを避けることを選んだハックを次のように説明する。

「この家族の中で事が起こらない限り反対はしないことにしたんだ。ジムに話しても無駄だから僕は何も言わなかった。父さんからは何も教えてもらわなかったけど、こんな奴らとうまくやって行く最も良い方法は、奴らに気の済むようにさせておくことなんだってことは教えてもらったんだ。」

(I hadn't no objection, 'long as it would keep peace in the family; and it warn't no use to tell Jim, so I didn't tell him. If I neve learnt nothing esle out of pap, I learnt that the best way to get along with his kind of people is to let them have their own way.) (106)

あくまでブアー・ホワイ特 Pap の子供であるハックには、正義漢の勇氣とは程遠い「処世術」に長けた少年の印象が付きまとう。こうしてみると、作者は結果としてプロットの上では人道主義を標榜しているが、ハックがジムを助けようと決断する直接の要因を、人道主義的な勇氣によるものとして規定してはいない。もちろんハックの葛藤のなかには、皮膚の色をこえたジムとの友情に心うごかされる人間的な優しさはあった。密告の手紙をいったん書いた後、次々と筏のうえの旅が思い出され心変わりする場面である。

「いつも僕のことをハニーと呼んだものだった。そして僕のことをかわいがってくれ、僕のためにはなんでも思いつくことをしてくれた。どんなに優しくったことか。そしてとうとう僕は捜索隊の男たちに天然痘にかかっているといってジムを救ってあげたときのことを思い出した。ジムはとても喜び、今までの一番の友達だと言った。そして今自分のたった一人の友達だと言った。」

〔〔He〕 would always call me honey, and pet me, and do everything he could think of for me, and how good he always was; and at last I struck the time I saved him by telling the men we had small-pox aboard, and he was so grateful, and said I was the best friend old Jim ever had in the world, and the *only* one he's got now;〕 (179)

このあとついに感極まって密告の手紙を破いてしまうことになるが、上で述べたように作者はそれを人道主義的な勇気へと結び付けることはしていない。飲んだくれで浮浪者の息子ハックには「奴隷制度」に挑戦できるほどの資格も勇気の片鱗も与えられていない。第一ハックの友情がオールマイティーであれば最後の10章の付加は必要なかったであろう。

II

ハックの行動と同様に32章以下のトムの行動も、物語の展開からは結果としてはジムの解放をもたらしたもののだが、人道主義とは程遠いむしろ冷酷さを印象づけるものである。トムは、「叔父さんのズボンから鍵を盗みだしてジムを盗めばいいものを」、ヘンリー4世らのヨーロッパの貴族や英雄の脱獄物語の様式にならって、穴を掘って退路を確保し、しかも「鞘いりナイフ」を使って37年かけて助けるんだといい、しかも「暇があれば壕を掘りたい、ジムの足から鎖が取れなければジムの足を切る」と言う始末で(34, 35章)、冒険を楽しむ為に、ジムの自由をゲームの対象としてトムの冷酷さには際限がないほどである。何よりもトムはミス・ワトソンの遺言でジムが自由のみのうえであることをすでに知ったうえでの行動であった。すべては「冒険を楽しむためのものだった」(242)と告白し、ハックやサリー叔母さんを納得させるだけではなく、「茶番劇」と批判されるに足るだけの行動原理であって、そこには人道主義とは程遠い、ジムをゲームの的にする冷酷さだけが浮き彫りにされている。しかし Robinson の見方はそのゲームの背景について一つの示唆を与えてくれるものである。

「このゲームは大まじめな“仮装”解放ゲームである。と言うのは、トムはこの解放劇を満足させることに自らを鼓舞し躍起になっているが、その一方でそうした冒険の数々が奴隷・人種問題を起こし保持して来た文化的な状況に根強い固定観念のあることを証明するものとなっている。」⁶⁾

この意味からも、ここで誤解していけないのはトムの身勝手さである。トムはヨーロッパの冒険ロマンスの様式に従って考えを始めると、その公式の上で通用する規則しかもたない。その為にトムは、それに基づく行為が人間ジムに対する冷酷なゲームとなっていることに気が付かない。たしかに人種差別・奴隷制度を軸とする逃亡奴隷・ジムをめぐる物語だが、作者が最後の10章にトムを再登場させたのは、その身勝手さ、あるいは人道主義的な側面での曖昧さを手掛かりに、むしろトムによって代表される主流的なアメリカ文化の中の典型的な白人少年を描くこと、言い換えれば白人を中心とするアメリカ社会を描き出す意図があったのではないか。

マーク・トウェインには、「先日サンフランシスコで、よい身なりの少年が日曜学校に行く途中、中国人に石を投げ付けたかどで逮捕され投獄された」事件を素材とする、“The Disgraceful Persecution of A Boy” (1870) というスケッチがある。サンフランシスコの人種差別への痛烈な風刺がいかにもマーク・トウェインらしいものである。このスケッチの眼目は、「あ、あそこに中国人が歩いている! 石を投げなきゃ神様に気に入ってもらえない」⁷⁾ と、この立派な服を着た少年に思い込ませるほど、この社会においては中国人への人種差別が浸透していた事実の指摘である。作者は中国人に石を投げ付けて捕まった少年にはむしろ同情しているのである。中国人迫害に対する、警察のにわか仕立ての矯正運動の犠牲になった子供への同情と、大人社会への痛烈な批判のスタイルは、ある意味ではマーク・トウェインの小説の原型となっている部分である。『ハックの冒険』は、もとより主人公ハックとトムは少年であるが、作者は少年の行動律はすべて大人社会の反映と考えている。逃亡黒人奴隷を目撃して、助けてあげようと瞬間的に思える南部の少年はまずいない。たとえそう思うことがあっても彼らの頭の中に反射的に浮かぶのは、「奴隷制度廃止論者はしっぽと爪をもった人間以下の悪魔だ」という言葉の方であろう。良い身なりの Good Boy ならなおさらそうであろう。プアー・ホワイトの子供であり、もとより Good Boy たりえない Bad Boy の境遇と運命にあったがゆえに、ハックは例外的である。逃亡奴隷を見れば、まさにこのサンフランシスコの少年と同じように、「あ、あそこに逃亡奴隷がいる。密告しなければいけない」と思うのが当然である。自らのモラルを持ち得ない少年はそれ程までに無垢である。いわば子供の無垢は大人社会のへ風刺の手段となっている。「彼の子供じみた登場人物は大人の偽善、感傷、残酷さについてのコメントとなっているばかりでなく、日曜学校社会の偽りの価値がそれによって判断される道徳律を意味するものとなっている」⁹⁾ のだ。

やがて『人間とは何か』(1906) で明らかになる作者の「人間機械論」の思想性の根幹としては、「人間はすべて外的な影響力によって動かされている」と考えるに至るが、トムの行動律のとらえかたの原点は、「外なる影響力なしにはなにも生まれ得ない」というものである。¹⁰⁾ 子供の「無垢」にはそれほどまでに大人社会の道徳律に支配される余地があり、その意味で子供の無垢は冷酷さと隣り合わせる危険性を常にはらんでいるものといえよう。“My Watch” (1870) というスケッチでは、一度修理屋に頼んでしまえば、次々と修理屋の「基準」にしたがって遅れたり進んだりして、とうとう正確な時刻を告げるものなくなった時計の話である。最後に作者は、「よい時計がよい時計でありえるのは修理屋の手にかかるまでだ」¹¹⁾ という結論を得たのであるが、真のモラルを持ち得ない人間がさまざまなモラルに持て遊ばされる運命を風刺している。ロマンスのモラルにしたがってジムを盗み出す行動を開始してしまったトムには、まさに人道主義的観点からすれば、間違った「時」を告げる時計をもち続けての行動であった。したがってその時計に従う限り、トムの行動は「正しい」のである。トムの冷酷さについていえば、作者が追求しようとしているのは、トム自身というより、トムが持たされた「時計」の実体、すなわち「奴隷制社会の倫理的規範」なのである。イノセントな子供であるがゆえに、トムは皮膚の色を越えた人間を愛することを美德とする倫理的規範を持たされていなかっただけである。

大人社会のモラルとしてもっと巨視的に見れば、Robinson のように、この作品を通じて支配的である「奴隷制度に対するアメリカ国民の欺瞞的黙認」の傾向が指摘されよう。すなわち自由と平等を掲げて独立を宣言して来たアメリカの最大の明白なパラドックスとしての奴隷制

度の存在、それを自らのうちに黙認し続けて来たアメリカ文化の矛盾である。単なる right or wrong という二者択一のモラルの次元をはるかに越えた、「自己欺瞞の力学」(“bad faith dynamics”) ¹²⁾ がいやおうなくトムをそこに追いやったと見れば、もとよりその冷酷さ、身勝手さも少年トムの責任をはるかに越えたところにあると言わねばならない。

Ⅲ

32章以下のトムの、叔父さんのズボンから鍵を盗んで簡単にジムを盗み出せるのに、鞘入りナイフでトンネルを37年かけて掘り、脱獄を成功させることにするその計画は、そうした国民的規模での「自己欺瞞的」行動が端的に現れている。これはトムの冒険ロマンスの様式に従う脱獄劇を装う一種の「偽装行為」である。それはロマンスの様式に則り、王侯・貴族のように脱獄を実行することだが、物語の初めの部分の、日曜学校の子供達を砂漠の隊商と見立てて襲う盗賊団ごっこは本質的に違っている。ここではトムは黒人奴隷の逃亡幫助という「悪魔の行為」であるがゆえに、それをカムフラージュする自己欺瞞的な「偽装」としての性質を一層色濃く帯びている。その脱獄の偽装が時として現実の障害にぶつかると「ふり」をしてさらに「偽装」を持続させ、トムは際限のない「自己欺瞞」の環の中に陥るようでもある。

そもそもトムのシナリオでは、ジムは黒人逃亡奴隷ではなく、ヨーロッパの城のなかの牢獄に幽閉された王侯貴族の脱獄という想定である。それはトムの内面からすれば奴隷制度の直視をはぐらかすカムフラージュであると同時に、物語の展開からすれば、その中心をなしている「人種差別・奴隷制度」から読者の注意をそらせる傾向にある。その「偽装」は、ジムの身の上をゲームの対象としてもてあそんでいる点でトムの「冷酷さ」と結びつくものである。しかし、その偽装には常に二重三重の自己欺瞞的な性質が付きまとう。王侯貴族の脱獄というカムフラージュによって奴隷逃亡幫助をしながら、あまりにも緊迫感がない状況はロマンスの実体とはあまりにもかけ離れてしまう。そこには逆に緊張と危険をもたらす奴隷制度というトムにとってはタブーが存在しなくてはならない。

フェルプス農場の様子は逃亡奴隷ジムを盗み出す状況としてはあまりにも平穏すぎる。叔父さんのズボンから鍵を盗み出して助けだすというハックの計画は“goose-milk”のように甘くて、セッケン工場に押し入ったときの評判にしかない。」(195) また、ジムが閉じ込められた状況も、トムには不満で仕方ない。

「チクショウ、なにからなにまで簡単すぎて始末におえないと来てるんだから。だから難しい計画を練ることが余計にひどく難しくなるんだ。眠り薬を飲ませないけりゃいけない見張りもない ... そしてサイラス叔父さんは皆を信用して、鍵もウスノロ黒ん坊にわたしてんだから。黒ん坊の見張りなんてよこしやしないだから。」

(“Blame it, this whole thing is just as easy and awkward as it can be. And so it makes it so rotten difficult to get up a difficult plan. There ain't no watchman to be drugged ... And Uncle Silas he trusts everybody; sends the key to the punkin-headed nigger, and don't send nobody to watch the nigger.”) (200)

ここでの状況を見た「冒険を楽しむ」トムにしてみれば、あまりにも安穏とした警戒態勢で

ある。ここには奴隷制度に対する疑念のひとかけらもない。ましてや奴隷を盗みだす「奴隷制度廃止論者」などの存在すら夢にも思わないほどの、ミシシッピ河下流の奴隷制度の日常的な定着がある。それがカムフラージュの背景とは矛盾するが、ゲーム感覚としてはトムの刺激を一層激しく要求するのだ。より困難で危険な状況は「奴隷制度と逃亡奴隷の脱走」という設定からしか生まれて来ないのだ。より困難な方法を見つけだす工夫をすればするほど、反奴隷制度への情熱が高まって行くかにも見える矛盾も存在する。もとよりトムにはその自覚はないが、Robinson が指摘した冒険の危険度と奴隷制度の意識度¹³⁾ が奇妙な形で絡み合ってくるところである。

トムは自身のスタイルに従った「脱獄」の方策を次々と考えるが、ことごとくそれでも控えめな現実主義のハックの意見に再考を迫られる。そしてトム自身自らのプランの非現実性は承知している。トムは「主義」を曲げるわけにはいかない。そこで「そのふりを装う」妥協案としての第2段階の「偽装」が生まれてくる。「カンテラが危険だというふりをするんだ。」(200) さらに「(ツルハシやショベルであっても) 鞘いりナイフだというふりをするんだ。」「37年かかったことにするんだ。」(205) と次々とそれらを提案したのはトムの方である。もとよりその答えを導き出してあげているのはハックだが、“right is right, and wrong is wrong” といってトムは形のうえでは主義を貫いている。しかしトムが手に豆を作り避雷針が上れなくなったとき、「避雷針を登ったことにすれば」(207) といったのはハックであり、トムもそれを受け入れ、この時点でその「偽装」が二人の妥協案となって計画はほぼ予定通り進行して行く。その「ふり」をしてでもゲームの緊張度を高め保持しなければロマンスの冒険味がなくなってしまうし、一方でカムフラージュされた「奴隷制度」への挑戦の緊張感も消えて行くかのようなのである。

そしてトムは再び現場があまりにも安穩としている状態に不満である。

「彼らときたら僕らを信用しきっていて、おまけに馬鹿なんだからまるで気がついてやしないんだよ。だから僕らが気づかせてやらないと僕らの邪魔をするものは一人もいないってことなんだよ。僕らが一生懸命骨折って頑張ったって、この脱走が全くつまんないものになってしまうよ。なんの価値もなくなって脱走なんかじゃなくなってしまうよ。」

(They're so confiding and mullet-headed they don't take notice of nothing at all. So if we don't give them notice, there won't be nobody nor nothing to interfere with us, and so after all our hard work and trouble this escape'll go off perfectly flat: won't amount to nothing — won't be nothing to it.) (224)

そのように判断した結果トムは自分たちの脱獄計画を皆に密告する匿名の手紙を書く。もとよりこの暴露は冒険をより迫真的にするためにトムのロマンスの様式に従ったものだが、すべてを信用しきって、まるで奴隷制度廃止論者の存在など夢にも考えないようなフェルプス農場の人達に、奴隷制度とそこから黒人奴隷を解放しようとする人がいることを意識させるようにも響くところである。トムのロマンスの様式から発し、本来その問題は回避されるようにカムフラージュされて来たものだが、トムの行動には常にこうした矛盾した二様の側面がつきまとう。その自己欺瞞的冒険が、「人種問題・奴隷制度を起こし保持してきた[アメリカの]文化的状況の根強い固定観念」¹⁴⁾ に図らずもコミットしているところである。

IV

実際この密告の手紙により、ジムの救出ごっこはトムが計画したどおりにスリリングな現実のものとなる。犬を放ち銃をもった捜索隊に追跡され、トムはすねに銃弾を受けて重傷を負う。3人は筏に逃れ、筏の上でトムはハックが連れてきた村の医者とジムに看病されるが、独りで逃亡することもせず看病に励んだジムは結局再び囚われの身となってしまう。傷は重く錯乱状態のままトムはフェルプス農場に運ばれるが、やがて事態を知らされたトムはジムが既に自由の身のうえであるというミス・ワトソンの遺言を伝えて、冒険物語は幕を閉じる。これまでの脱獄劇はすべてトムの書いたシナリオをもとに展開してきたが、そのトムにも予想できなかったことが結果として起きている。すなわち、いくら困難で危険な筋立てをもくろんだにせよ、自らの命が危うくなるを命懸けの奴隷救出となったこと、そしてもう一つは教育もない、キリスト教の犠牲の精神も知らないはずの黒人奴隷ジムが、あえて逃亡することもなく犠牲をはらって自分の看病してくれたことである。

「それじゃ、言うけどね、わたしにはこう思えるんだよ、ハック。もし自由の身のうえにされるのがトムさんで、そしてその一人が撃たれることになったら、トムさんは『僕を助けてくれ。この子を助けるために医者のことなんかにいかまわなくて僕を助けてくれ』なんて言うだろうか。それがトムソーヤーさんらしいと言えるかね。そんなこと言うだろうか。絶対に言いやしないよ。このジムだったらそんなこと言うだろうか。いいや、わたしは医者が来なければここから一步だって動きやしない。40年たっても動かないつもりだ。」

(“Well, den, dis is de way it look to me, Huck. Ef it wuz *him* dat’uz bein’ sot free, en one er de boys wuz to git shot, would he say,’ Go on en save me, nemmine ’bout a doctor f’r to save dis one?’ Is dat like Mars Tom Sawyer? Would he say dat? You *bet* he wouldn’t! Well, den, is Jim gwyne to say it? No, sah-Idoan’ budge a step out’n dis place, ’dout a doctor; not of it’s forty year”) (230)

ジムはこのような主張しトムのそばにとどまって看病をする。さらに、「わたしはこんなに立派な看護婦であり忠実な黒ん坊は見ることがない。しかも彼はそうすることで自分の自由を危険にさらしていたんだ」(“I never see a nigger that was a better nuss [nurse] or faithfuller, and yet he was resking his freedom to do it.”) (238) と、ジムの献身的な看護の模様と人間としての偉大さが、現場にいた医者によって賛美される。

高熱にうなされ危ない状態が続いた後、ようやく回復の兆しが見えたトムはジムが再び鎖をかけられ捕らえられたことを知った時、今までになかった奴隷制度への怒りを露にする。

「トムはすくっとベッドで起き上がり、目を真っ赤にし、鼻の穴を鰓のように開けたり閉じたりしながら、僕に向かって怒鳴りつけるのであった。

『奴らにジムを閉じ込めておく権利はない。／すぐに行くんだ。／ぐずぐずするな。ジムを放してやれ。／彼はもう奴隷じゃない。地上を歩くどんな生き物と同じように自由なんだ。』

(Tom rose square up in bed, with his eye hot, and his nostrils opening and shutting

like gills, and sings out to me:

"They hain't no *right* to shut him up! Shove! — and don't you lose a minute. Turn him loose! he ain't no slave; he's as free as any creture that walks this earth.") (241)

今までの偽装の霧が全て晴れ、まるで偽装の脱獄行為によって本物の「奴隷制度廃止論者」に変容したかに見えるトムの姿を見る思いがする。しかし、にもかかわらず作者はこの直後トムに、ワトソンさんがジムを川下に売り飛ばそうとしたことを恥じて、遺言ですでにジムを自由のみのうえにした事実を暴露させる。さらにすべては「冒険を楽しむためのものであった」と語らせ、いわば一挙に高まった人道主義的な気運の全てを台なしにしているかに見える。またハックには、トムのような育ちのものが奴隷を自由にする助けをした理由についても解き明かしている。すべてが「茶番劇」であり、Hemingway に読者を欺くまやかしの結論だと言わせたゆえんである。

こうして見てくると、作者の立場からすれば、逃亡奴隷ジムをめぐる少年たちの行動を、いわば二元論的に提示してきたそれなりの理由があるはずである。それが奴隷制度に対する政治的中立を保持してきたものであるか、それとも少年たちの認識そのもののアンヴィギュアスな側面を保持し続けた作者の意図なのか、この少年たちの活躍の時代設定である作者自身の184, 50年代の状況から考えて見る必要がある。1835年生まれのマーク・トウェインは10歳そこそこでトムやハックと同年配の少年だった頃である。

幼いサミュエルが物心ついた時に Clemens 家は奴隷州ミズーリーのハニバルにあって他の多くの家と同じように奴隷所有の家庭であった。¹⁵⁾ さらに父親が金策のために自家の奴隷を売ったこと (2)、そして彼の敬愛してやまない母親でさえ「奴隷制度というものが、露骨で醜い不当な人権侵害であるとは意識していなかった。」(30) また母親が自家の奴隷少女にムチでお仕置きをしようとして反抗され、代わって父親が少女両手を手綱で縛り上げ背中をムチで打擲した事件もあった。¹⁶⁾ しかし、その母親にも奴隷に対する優しさと同情心はあったのである。サミュエルが一日中歌を歌い口笛を吹きわめいてばかりいる奴隷少年 Sandy をなじると、母親は、彼が Maryland の家族から離れ独りぼっちであることを思いやりなさいと息子を諭したものである。(6)

なにより彼が毎夏の行事としてその訪問を何よりも楽しみにしていた叔父の農園での黒人たちとの交わりは、自伝の中でも誇らしげに回想されている。そこで毎夜のように昔話をしてもらった、ジムのモデルともなった Uncle Dan'l は、同年配の黒人少年たちとともに「黒人たちに強い愛情を感じ彼らの優れた特質を評価できるようになった」(6) かけがえのない黒人の知己であった。しかし自伝のその数行後には「奴隷制度に対して反対する気持ちはまるでなかった」と回顧される。「穏やかで家庭的な奴隷制度」(30) で、奴隷たちを震え上がらせた川下の奴隷社会とは随分違ったものであったことは事実であろうし、奴隷制度が是か非かの決断が常に留保される状況でもあった。イノセントな子供であるがゆえに心情的には黒人奴隷に同情し、かつまた社会規範としての「良心」に縛られ、少年サミュエルの心のなかでは、もとより奴隷制度是非の判断はつかぬまま、大人たちの言動に揺れ動くままの状態ではなかっただろう。

しかし「奴隷制度廃止論者が尻尾と爪をもった人間以下の悪魔」¹⁷⁾ と教えられ、彼らがリノンチにあう場面の目撃は、黒人たちとの交友や同情のそれよりはるかに深く心に焼き付いたことであろう。奴隷制度の確たる浸透ぶりは、ハニバル時代を回想する自伝の随所に見いだし

れ、ハックやトムの中で「奴隷制社会の倫理規範」として厳然として存在していたものと言えよう。なによりも、社会規範の守り手としての「治安判事」職にあった父親の存在は、幼いサミュエルにより一層強い影響力をもっていたはずである。

それにしてもやがて成人したサミュエルには、奴隷制度そのものに責任ある態度表明をしなければいけない場面も出てくる。彼が20歳になろうとする1854年には Kansas-Nebraska Bill が成立し、黒人の土地所有・Free Soil をめぐって奴隷制度の賛否両論のなかでカンザスは内戦状態にあった。ミズーリーでも奴隷制度推進論の勢力と反対派がその内戦の渦のなかに巻き込まれて、世の中は騒然としていた。結局ミズーリーでは南北戦争が始まるとほとんどのミズーリー人が北軍についたと言われるが、¹⁸⁾ 南北戦争が起きるや、マーク・トウエインは反対派の共和党に加わった兄とはちがって賛成派につき南軍に入隊する。自伝に明確な賛成派への決意は語られていないが、結果として奴隷制度容認の意志表明をした行動であった。しかしマーク・トウエインはわずか2週間で離隊し、そのあと兄オリオンと西部への旅に発つ。兄オリオンは少年時代から死ぬまでずっと「奴隷廃止論者」であり(86)、リンカーン内閣の政務長官としての公職に従事した旅なのであった。その後も黒人と白人の雑婚に反対したかと思うと、大学を通じて黒人学生に奨学金をだすという具合で、そもそも成人してからの行動をとってみても、少なくとも『ハックの冒険』を書く時点までは奴隷制度に対しては、もちろん積極的な賛成派の言動はなかったとしても、思想のうえで旗幟鮮明であったとはいえぬ曖昧さがつきまといっていたと言わなければならない。

マーク・トウエインがトムの心を常に二様に描出した背景は、ちょうど同じ時代の、同じ年頃の幼い自身の幼年体験に、トムの行動を重ねて見た結果だと言えないだろうか。ゆえに、「茶番劇」と断罪してしまうことのできない「人種差別・奴隷制度」に対するマーク・トウエインの語る文明批評が最後の10章に集中してあったものと言えよう。おなじく St. Petersburg の名をもつハニバルの社会を描きながら、『ハックの冒険』においては彼はこの社会への批判を持ち込んだのだ。『トム・ソーヤーの冒険』においては「社会が少年の心の中を通過しているにしかすぎないが、ここにはものを言う50歳の大人がいるのだ。」¹⁹⁾ まさに「ものを言う50歳の男」マーク・トウエインの《自己教育》が、とかく論議を醸されることの多い最後の10章の展開をこのように屈折させたものと言っているだろう。

その一つはトムのロマンスの様式に従った脱獄ゲームが、その偽装性によってジムをゲームの道具にした冷酷さを強調すると同時に、逆説的に「奴隷制度」の文化的固着があったことを一方で示し、自己の幼年体験の眼目と指摘している点である。もう一つはハックとトムという社会的背景の対照的に違う二人の少年の出会いによる、新たな奴隷制度への批判と人道主義の期待である。ハックはプアー・ホワイต์の子供であり、体制の外にはみ出した所に住むがゆえにジムの解放の援助ができたものである。トム一人では逃亡奴隷ジムとの冒険物語は成立しないし、「人種差別・奴隷制度」をテーマとする自己教育のテキストにはハックとその心の葛藤が必要だったのである。

ハックのモデルは作者の幼年体験での重要な友人である Tom Blankenship であることは自伝で作者が明言している。「彼は無知な少年で、ふろに入ったこともなく腹一杯食事したこともなかったが、その自由はだれの制約も受けないものだった。彼は唯一の、本当の自主独立の人間だった。」(68) このモデルの少年がいなければ、すなわち全ての社会規範から自由になれる「自由」そのもののハックがいなければ、この作品は生まれて来なかったといっても言い

過ぎではない。トムはそのハックに出会うことによって奴隷制度への挑戦をカムフラージュする偽装によって、まがりなりにも奴隷解放を結果として実現させることができた。トムはロマンスの様式が生み出したシナリオの上でのリアリティに満足しながら、同時に現実のアメリカ南部社会での奴隷解放というもう一つのリアリティをも実感することになった。Tom Blankenship との出会いのあった幼年体験の一つの可能性として、作者は Clemens 家の息子として閉ざされた幼年の自己をいわば奴隷制度の絡む物語のなかで解放しているのである。

トムの行動はもとより偽装にまみれた脱獄劇の中での出来事としているが、そこには虚構を越えて、現実の奴隷制度に対決したリアリティが読者の胸を打つ。先に引用したジムの自己犠牲的で献身的看病の様子を告げる会話は、実は場面の状況からするとトムの耳には入っていない。しかし読者はそのジムの行動を知らされたトムが、「ジムは地上のどんな生き物と同じように自由なんだ」と叫んだように錯覚する。ここにこそ作者マーク・トウエインの本音としての勇気ある人道主義への期待があり、「かずかずの社会的不正にたいするあけすけな批判のすべての基盤にした、社会的・倫理的悪としての奴隷制度の実体に関する自己教育」²⁰⁾としての側面があったものと言えよう。

おわりに

最後の10章全体を眺めると、奴隷制度を背景とするジム救出の現実と、ロマンスの世界の様式と二様の現実があり、トムは常にこの10章全体を通して偽装を続け、ハックのようにジム救出の必然性をもたないトムが、言わば自己欺瞞的に奴隷救出ををしてきたものと言えよう。マーク・トウエインが書いた“*My First Lie, and How I Get Out of It.*” (1899) で表明した国家的レベルでの「沈黙の主張という嘘」は、ある意味では「奴隷制度」にたいするトムの欺瞞的行動に通ずるものがあった。

マーク・トウエインが定義する「嘘」というのは、人々は奴隷制度が「自由と平等」に反していることを承知していながら、「独裁政治、宗教的隷属の強制、貴族政治」と同じように、何も悪くはないと沈黙させられてきたと見る。「口を噤まされた息苦しい歴史の中で暮らしてきた」のだという。正直者なら「奴隷制度は間違っている」と声に出して叫ぶところをずっと口を噤まされて来たのだ。奴隷制度に異議を唱えることなく黙認することは、まさに奴隷制度の「沈黙の主張」をしていることであり、それは意に反していることだから「嘘」だという訳である。²¹⁾ 人々は個人レベルの嘘は弾劾することはあっても、これらの国家的レベルでの嘘を弾劾することは許されなかった。

やがて国家レベルでの社会批判が帝国主義批判という形でその嘘が追求されることになるが、『ハックの冒険』を書いた時点での「奴隷制度」にたいするマーク・トウエインのアンビギラスな姿勢は、『プディングヘッド・ウイルソンの悲劇』と比較すればより明白であろう。32分の1の黒人の血が悪事を働かせたのだとロキシーに言わせ²²⁾、結局その息子が黒人奴隷として川下に売られて行く結末は、「人種差別・奴隷制度」に対する人間の所業に絶望しすべてを悲観している。一方『ハックの冒険』では人道主義的な倫理的気運で一気に奴隷解放論者を活躍させる展開こそなかったが、トムやハックにはその可能性を暗示させ、人間社会への期待が否定できず楽観主義がまだ存在しているように見える。マーク・トウエインの晩年の思想は、『不思議な少年』や『人間とは何か』における「人間機械論」に見られる虚無的な悲観主義に

至るものだが、またもう一方では、スペイン・アメリカ戦争の勝利によって得たフィリピンの併合に対するマークトウェインの《反アメリカ帝国主義連盟》の副理事長としての社会的活動も忘れてはならない。これらの熾烈を極めたアメリカ帝国主義批判については稿を改めて論じなければならないが、ここではそれらの批判精神が突如として起きたものではなく、『ハックの冒険』において既にその萌芽を見ている事実の指摘に留めたい。

注

- 1) テクストは Henry N. Smith 監修の Riverside Editions (Boston, Houghton Mifflin Company, 1974) を使用。
- 2) Hemingway, Ernest, *Green Hills of Africa* (New York, Scribner, 1935) p.22.
- 3) De Voto, Bernard, *Mark Twain At Work* (Cambridge, Harvard U.P., 1942) pp.89, 91.
- 4) Cox, James N., *The Fate of Humor* (Princeton, Princeton U.P., 1966)
- 5) Carrington, Jr., George C, *The Dramatic Unity of Huckleberry Finn* (Columbus, Ohio State U.P., 1976)
- 6) Robinson, Forrest G., *In Bad Faith* (Cambridge, Harvard U.P., 1986) p.179.
- 7) Neider, Charles, *The Complete Essays of Mark Twain* (Garden City, New York, Doubleday, 1963) p.9.
- 8) Paine, Albert Bigelow, *Mark Twain A Biography*, Vol. 1 (New York, Gabriel Wells, 1923) p.42.
- 9) Stone, Jr, Albert E., *The Innocent Eye* (Hamden, Archon Books, 1970) p.44.
- 10) Mark Twain, *What Is Man? and Other Essays* (New York, Gabriel Wells, 1923) p.101.
- 11) Mark Twain, *Sketches New and Old* (New York, gabriel Wells, 1923) p.5.
- 12) Robinson, p.123.
- 13) *Ibid.*, p.179.
- 14) *Ibid.*, p.179.
- 15) Neider, Charles (ed.), *The Autobiography of Mark Twain* (London, Chatto & Windus, 1960) p.2. 自伝の引用はこのテキストによる。
- 16) Paine, p.17.
- 17) *Ibid.*, p.42
- 18) Beaver, Harold, *Huckleberry Finn* (Boston, Allen & Unwin, 1987) p.5.
- 19) DeVoto, p.89.
- 20) Geismar, Maxwell, "The Shifting Illusion", *American Dreams, American Nightmares*, ed; Madden, David (Carbondale, Southern Illinois U.P., 1970) p.48.
- 21) Mark Twain, *The Man That Corrupted Hadleyburg and Other Essays and Stories* (New York, Gabriel Wells, 1923) p.162.
- 22) Mark Twain, *The Tragedy of Pudd'n' head Wilson* (New York, Gabriel Wells, 1923) p.123.